

増尾先生の思い出

六川 裕子

この度、増尾弘美先生が御退官されることを知り、心底驚いた。先生が退職される年齢になられるということを全く予期していなかった不意を突かれたためと、初めて先生にお会いしてからもう20年以上になるという事実に変更して思い至ったためである。月並みな言い方だが、本当に時の流れるのは恐ろしいほど速いものだと思感する。先生の御退官を記念する文章を書く機会をこうしていただけたので、それほど昔だとも思われない記憶の中を探り、先生との思い出を教え子の立場から記してみたいと思う。

私は学部は筑波大学ではなかったため、増尾先生にお世話になるのは大学院からである。初対面はおそらく大学院入試の面接の時だと思うのだが、どういう訳かこの時の記憶はほとんどない。そのため、私の中で最も古い先生との思い出は、入学後の、確か授業が始まる前の、顔合わせの時のことである。筑波大学の大学院の組織もずいぶん大きく改編されたと伝え聞いているが、当時は「人文社会科学研究科」の、「文言・言語専攻」の、「フランス文学領域」というのが我々の所属だった。私を入れた2名がこの年、2003年度のフランス文学領域の新入生で、増尾先生の研究室で新入生2人に向けて、今後の授業や研究の進め方についての説明があった。そして論文の原稿や授業用のレジュメなどをメールで送るように、という話になったのだが、お恥ずかしいことに、この時の私は添付ファイルの送り方というものを知らなかった。これを思い返すと大きな時代の変化を改めて感じるが、この頃は携帯電話（もちろんいわゆるガラケー）もインターネットも一般的に普及して利用されていたものの、まだ一般化の初期の頃で、大学院生でも私物のパソコンを持っていないこともそれほど珍しくはなかった。私は学部の卒業論文をワープロという機械で書いた、おそらく最後の世代なのではないかと思うのだが、まだまだ当時は電子メールもおっかなびっくり使っていたのである。

文書をどうやって添付ファイルで送るのか分からない、と正直に申し出ると、ご親切にも先生が直接教えてくださることになった。そう考えると、私が筑波大学大学院のフランス文学領域に入って最初に学んだことは、電子メールの添付ファイルの送り方だったということになる。研究室に私だけが残し、先生はご自分のパソコンでメール画面を開き、一つ一つ丁寧に教えてくださった。感謝と恥ずかしさの入り混じった気持ちと共に、この時のことは一番最初の増尾先生からのご指導の思い出として、今でもはっきり記憶に残っている。

と、ここまで書いてきて、大学院生時代の増尾先生との思い出を語ることは、当時の未熟な自分の恥をさらすことでもあるということに気が付いた。だが、今さら気付いてももはや後の祭りである。このまま先を続けることにする。

フランス文学領域の新入生が私を入れて2名だったことはすでに述べたが、それより前は何年

も入学者がおらず、領域内には先輩と呼べるような存在はいなかった。その分、人数の多かったフランス語学領域の院生の皆さんとの交流があったが、授業は全く別であった。そして私の入学当時のフランス文学の教員は、増尾先生と有吉豊太郎先生とのお二人で、院生2名に教員2名という実質的にマンツーマン指導の、贅沢な環境で私の大学院生活はスタートしたのである。私の研究テーマは作家のアナトール・フランスであったので、現代詩がご専門の有吉先生ではなくブルーストがご専門の増尾先生に担当教官になっていただくことになった。単に20世紀の小説という共通点だけではなくて、A・フランスはブルーストが若い頃に愛読して憧れていた作家であるというつながりもあり、私の研究対象と先生の研究対象とは、師弟関係はちょうど逆になる。ただ、関連があるとは言っても、ブルースト研究においてA・フランスはそれほど重視されているわけでも研究されているわけでもなく、増尾先生は私の研究指導のために、改めてA・フランスについて調べ、準備してくださったようである。今思い返しても、きめ細かく対応していただいたことには感謝するばかりである。

授業はいつも先生の研究室で行われていた。受講する学生は、その後新入生がちらほらとあったり、他の領域のフランス文学関係の院生が参加したりすることもあったが、基本的にごく少数で、落ち着いてのんびりした雰囲気だった。もちろん私としては一生懸命勉強したつもりだが、先生の授業では過度に緊張を強いられるようなこともなく、淡々とした調子の中にたびたび独特なユーモアが差し挟まれる先生のお話を、院生たちは楽しみにしていたものである。

授業の内容は、フランス語で書かれたブルースト研究を精読するものが主だったと記憶している。毎回四苦八苦しながら予習をしていたのも、今となっては学生らしい思い出である。ブルーストの『失われた時を求めて』は言わずと知れた大作なので、フランス文学研究者でも未読であることは決して珍しくないと思うが、また一つ自分の恥をさらすと、私はすでに2回ほど『失われた時を求めて』の最初で挫折していた。1回目は確か学部の二年生の夏休みで、図書館で借りた集英社の世界文学全集のフランス編の中に、第1編第1部「コンブレ」が収録されていた。夏休み中にいろいろなフランスの作家を読もう、と意気込んだのだが、最初に入っていたこの「コンブレ」が当時の私には難しく、読書は遅々として進まなかった。どうにか字面を追って読み終えたところで力尽き、他の収録作品は全く読めないまま本を返却することになり、この時の経験は少々苦い思い出として残ったのである。2回目は、学部の授業で使用テキストとして指定があり、文庫版の第1巻を購入した時のことだ。結局授業ではほとんど使わなかったのだが、最初の時よりはブルーストについての知識も少々増えており、せっかく手元にあるのだからと再チャレンジした。そして全く同じ「コンブレ」の最後で力尽きた。どうしても第2部「スワンの恋」に進めないまま、少々トラウマ的な、軽い苦手意識の対象に、ブルーストはなってしまっていたのである。

そういう訳でブルーストについては「コンブレ」の知識と印象しかなかった私であるが、より明確でポジティブなイメージを持つことができたのは、やはり増尾先生の授業のおかげである。ブルースト研究の読解を通して論文の書き方などについて学ぶと同時に、『失われた時を求めて』の作品世界についても分かりやすく解説していただいた。おかげで、作品は未読ながらも、どん

な登場人物がいてどのような人間関係なのか、有名な場面にはどんなものがあるのか、かなり具体的に知識を得ることができた。プルーストについての研究書でなくとも、プルーストやその作品について言及がされていることは頻繁にあるため、こうして学んだことはその後いろいろな研究を参照する際に非常に理解の助けとなった。またそれ以上に、先生のお話からは『失われた時を求めて』という作品の魅力が伝わってきた。よく目にする解説では、この作品はそれまでのいわゆる「小説」の概念とは異なる新しい文学であり、ストーリーと言えるようなものはない、といった表現がされており、難解な作品という印象を受けるが、決してそれだけではなく、小説としての、読み物としての魅力も十分に備えた作品なのだということが、先生の授業からは感じられたのである。

研究指導の面でも、もちろん先生には大変お世話になった。論文の文章をととても丁寧に見てくださり、決してご自分の意見を押し付けるようなことはなく、それでもいつも率直で客観的な指摘をしてくださった。研究を始めたばかりの学生が相手でも、その「研究者としての勘」を尊重して指導してくださる姿勢には、研究者を目指す者としては大いに励まされた。増尾先生の下で修士論文を提出した後、博士論文の準備も始めたが、やはりフランスへの留学が必要であろうと判断し、博士論文は留学先で書くことにした。留学はおろか、実は海外旅行もしたことなかった私は、この留学準備の時もずいぶん先生にお世話になった。直接相談ができるような先輩も身近にはいなかったため、先生にいろいろと教えていただき、留學生活に関する具体的なアドバイスなども頂いた。おかげでどうにか、フランス南西部のトゥールーズへ留学することができたのである。

トゥールーズには2年間滞在し、その後は帰国して博士論文を完成させ、トゥールーズで口頭試問を受けることになった。この時は増尾先生にも審査員の一人として、はるばるトゥールーズまで足を運んでいただいた。本番当日、これからフランス語で口頭試問を受けなければいけない、という不安と緊張でがちがちになっていたところへ、大学の構内で増尾先生とお顔を合わせた時には、やはり少しほっとした。それと同時に、心細い留學生活を過ごしたその場所に顔なじみの先生のお姿があり、トゥールーズで指導してくださった先生方と並んでおられるという光景を見るのは、とても不思議な感じがしたのを覚えている。その日の晩は夕ご飯もご一緒したのだが、あまりに緊張感が強かったせいもあってか、今となっては何か非現実的な出来事のような印象すらある。

その時からもうすでに10年以上が経ったが、いまだに増尾先生にはご心配頂いているような不甲斐ない身であるのは、申し訳ないことである。それでも大学教育の一隅に身を置く立場で、日々強く感じているのは、やはり大学を取り巻く環境の大変に激しい変化である。インターネットやAIが直接的に教育活動にもたらす変化だけにとどまらず、情報技術の発達に伴う生活や働き方の変化、少子化による社会構造の変化、さらには国際情勢の緊迫した動向や人類の存亡に関わる地球環境の変化まで、様々な問題が絡まり合う中で、大学教育に求められることも大きく変化し

多様化していつている。そんな状況を前にして、正直なところ、フランス文学の研究や教育が今後どうなっていくのか全く見当がつかない。この先の教育環境や研究環境は、きっと増尾先生がこれまでに教員生活を送ってこられた環境とは全く違ったものになっていくのだろう。だがそうだとすると、未知のことに人が対応する時には、やはり参考にできるものは過去の経験しかない。それに変わっていくものもあれば、きっと変わらないものもあるだろう。今後もうしばらく、予測の難しい状況の中でもがき続ける我々後進の者に対して、先生のこれまでの経験から、また現役の教員とは少し違った立場から、ぜひご助言頂き、見守っていただければ幸いである。とは言えひとまずは、長い教員生活のお疲れを癒し、十分に休息を取っていただきたい。目下の者から労いの言葉をかけるのはおかしいのかもしれないが、やはり、これまでの長年のお勤め、お疲れさまでしたと申し上げたい。こうして振り返ってみても本当にいろいろとお世話になってきた。この場を借りて心より感謝の気持ちをお伝えしたいと思う。どうもありがとうございました。

最後にもう一つ、恥ずかしながら告白しておく、私は数年前から『失われた時を求めて』に三度目の挑戦をしている。研究や勉強とは無関係に、単純に趣味としての読書である。苦手意識すらあった作品をこうしてまた手に取ったのは、もちろん増尾先生の授業でその魅力を教えていただいたおかげである。今回は「スワンの恋」から始めて、無事にその先に進んでいる。とは言うものの、長期休みなどの時間の余裕のある時に、地元の図書館で文庫版を一冊ずつ借りてきて読む、というようなペースなので、何年もかかってまだ全体の半分にも達していない状態ではある。だが、今回は最後まで行けそうな気がしている。今読んでもやはり、決して読みやすい小説ではないと感じるが、自分なりに楽しめる読み方が見つかったように思う。何より、先生の授業に出てきた登場人物に出くわすと、これはあの時のお話にあった人物だ、という再会のような気分になり、実際はこんな人物だったのか、という発見もある。私の『失われた時を求めて』の読書体験は、先生の授業の記憶の想起と共にある。そしてこの体験は、楽しみは、この先まだまだ長く続きそうである。いつかこの作品について語り合いたい、などとは恐れ多くて口が裂けても言えないが、このような形で名作との出会いに導いていただいたことにもお礼を述べつつ、この文章を終えたいと思う。

(ろくかわ ゆうこ / 埼玉大学、白鷗大学非常勤講師)